

あきらめない

平尾小・5 大場 一架

わたしは運動をすることが好きです。特にバスケットボールが大好きで、市内のミニバスチームに所属しています。

ある日、体育の授業が終わり教室にもどつてすぐ、おなかがズキズキといたくなってきました。学校から帰るころにはいたみがひいたので、あのいたみは何だったのかな、と思いました。次の日も、ミニバスの練習中におなかがいなくなってきました。これはおかしい、と思い、母に病院へ連れて行ってもらいました。その日は薬を出してもらい、その薬を飲んでねました。しかし、おなかのいたみで夜中に何回も目を覚ましてしまい、なかなか寝つけませんでした。次の日は学校を休み、家で様子を見ることにしました。しかし、今までにないげきつうにおそわれました。そのまま救急車で運ばれ、検査を受けました。わたしは救急はん送されるとは思っていなかった。不安でいっぱいでした。

検査の結果、「I g A血管えん」という病気だったことがわかりました。そして、しばらく入院することになってしまいました。「I g A血管えん」は、血管がえんしょうを起こす病気で、運動はもちろんベッドからおりることもできない、と病院の先生から説明を受けました。いつから学校に行けるの、いつからバスケットボールができるようになるの、と考えるだけでなみだが出そうになりました。

入院してからは、毎日点てきを行い、薬を飲み、絶食になること

もありました。ずっと部屋の中で生活をし、外の空気もすえず、心が元気でなくなっていました。しかし、家族やかん護師さん、学校みんなが元気づけてくれました。友達からの手紙と動画を見て、早く治して退院したい、早くみんなと遊びたい、と強く思いました。

二十日間の入院生活を終えて、ようやく退院することができました。学校にはすぐに行くことができ、たくさんの友達が出むかえてくれてとてもうれしかったです。しかし、退院してもすぐに運動をすることはできませんでした。このときは、退院できたことがうれしくて、バスケットボールがまだできないことは仕方ないとは思っていませんでした。

退院から数日がたち、日常生活を少しずつ取りもどしていくことができました。しかし、運動制限だけはなかなか解じよしてもらえませんでした。

ある日、久しぶりにミニバスチームの練習を見学に行きました。一か月ぶりにみんなのプレーを見て、みんな上手になっている、わたしだけおいていかれている、どうしよう、という思いをもち、とてもあせりました。母に

「いつから練習に参加できるの。どこまでならやってもいいの。」と、何回も何回も確にんしました。すると母は、少しこまったような表情を見せながら、

「先生に相談しながら、少しずつ練習に参加してみようか。」と、答えてくれました。わたしはやつとバスケットボールができると思い、とてもうれしかったです。

コーチにも練習に参加することを伝え、久しぶりにボールにさわ

りました。病気になる前とはちがう感覚で、とてもやりにくく、違和感がありました。前の感覚にもどしたくて、たくさん練習しないと、とあせりました。体力もすぐ落ちていてみんながやっているメニューにもついていくことができなくなっていました。体力がないと練習にも参加できないし、みんなにも迷わくをかけてしまう。あせったわたしは父に相談しました。

「体力をもどすには、どうしたらいいの。」

父はいっしょに考えてくれて、夏休みの間はそのメニューをこなして体力アップを目指すことにしました。そんなとき、コーチからある話がありました。

「一架は、病気のこともあって体力がかなり落ちている。実力差も開いてきてしまっている。一つ下のチームに移せきすることを考えてもいいかもしれない。」

わたしの頭の中は真っ白になってしまいました。それでもわたしは、今のチームでプレーがしたい、がんばりたい、と強く思い、コーチに残りたいことを伝えました。今のままではだめだ、もつとがんばらなきゃ、自分で決めたことだから最後までしっかりやりきる。チームのためにも、自分のためにも。

わたしの病気は、まだ完治したわけではありません。再発のリスクもあります。また入院生活になったとしてもあきらめずに努力して、練習を積み重ねていきたいです。